

文士の放恣なる實生活を

女性作家はどう見て居るか

○記者。 田舎に居た時の作家と云ふものに對する感じと出京して親しくその實際を見たり聞いたりした時の感じとは非常な違いがあつたでせう。斯う云ふ筈ではなかつたと云ふやうな心持はしませんでしたか。

○仙子。 いゝえ別に何とも思ひませんでした。田舎に居ましても六號記事などが好きで作家の方々の日常が何うであるかぐらゐのことは、それに依つて大抵知つて居ました。それに、作家の實際生活と申しましても、田山先生より外の方々には親しく接したことがありませんから能く存じて居りません。

○記者。 白鳥氏と秋江氏の一件、泡鳴さんが妻子もあり家庭もある身でありながら、他の女と同棲するなど、あゝ云ふことを何う思はれます。

○仙子。 別に何とも思ひません。一體人の行爲に對して善いとか悪いとか云ふには、先ずその善い悪いの定義を決めてからでなければ申されません。ですから私は、何もその人の自由ですから、他の方がどんな事をなさらうとも、それを褒めやうとも思はねば、又貶したり、責めたりしやうとも思ひません。私は人様のなさることに對して自分と云ふものをださないやうにして居ます。自分を離れてその人自身の境遇なり、心持ちなり、又、性格なりを能く能く理解しますと、譬へどう云ふことをしても決して一口に善いとか悪いとか言へるものではありません。然う云ふことをするには其所に至るまで餘儀ない約束があります。何うして一本筋に悪いと決めて了ふことが出来ませう。白鳥さん、秋江さんのことでも泡鳴さんのことでも、又、一般作家の方々がどんなに實際生活に不眞面目であらうとも、世間一般から見ても悪いこと、責む可きことかも知れませんが、眞にその人自身が感じてなさることなれば一向差支へないと存じます。たゞ自分が本當に感じもせず、がつたり、ぶつたりしていろんなことをするのは、蟲唾がはしる程嫌ひでございます。で、善い悪いは別にして何う思ふと云ふことなれば、白鳥、秋江さんのことでも、泡鳴さんのこ

とでもたゞ面白い、興味あることゝ思ひます。但し、白鳥さん、秋江さんのことも、その精しい事實は存じません。作品と事實を結び付けてそれに依つて知つて居るぐらゐのことで御座います。

○記者。無論、善い悪いはもうされますまいが自分の友人の女を奪ふなんて、感じから云つて何うです。

○仙子。一體白鳥さんは何う云ふつもりでそんなことをなされたのでせう。

○記者。初めは好奇心でせう。併し重なるに従つて、時の長短、自覺の有無は別にして次第に巻き込まれて本氣になつて行つたのは事實でせう。

○仙子。白鳥さんには厭な感じがします。秋江さんは氣の毒、泡鳴さんが一番芸術的だと思ひます。

○記者。田山さんの『縁』には貴方も書いてありますね。

○仙子。えゝお終ひの方に少し。

○記者。永代美知代さんの書かれた、『或る女の手紙』に依つて見ると、美知代さんは貴方や田山さんに對して敵意を持つてるやうぢやありませんか。

○仙子。あの作品を直ちに事實として見ますと、如何にも成心を持って書いたものより外受取れません。或る人はあれは田山先生や私に對する復讐として書かれたものだと、あれの發表當時も言はれたさうですが私など何も美知代さんに復讐されるやうなことをした覚えはありませんし、又、田山先生にしても本當に美知代さんの身を案じ、その將來の幸福を思つて居られるのですし、それを分らないやうな美知代さんではありませんから、あの作に現れたところと美知代さんの本當の心持ちとは餘程違つていると信じます。一體、筆の達者な人ですから、少し走り過ぎたのではないかと思ひます。何う考へて見ましても、あの作品に現はれたやうな感情を美知代さんが我々に對して抱かれるやうな理由がありません。若し、本當にあゝ云ふ心持ちだとすれば情けないと思ひます。永代さんと別れてから先生のお世話で私と二人で持つて居ました代々木の家を出て再び永代さんと一緒になられる時だつても、美知代さんは先生にも黙つて出て了はれ、それから二三日経つて永代さんが道具を取りに車と荷車一臺連れて來られました。私はどうぞ先生に一度斷つてからに

して下さいと申しますと、私等の荷物を私が持つて行くのに先生に會ふ必要はない。そんなことをして文壇の話種を作る必要はないぢやありませんかと申されました。美知代さん自身も、永代さんが二度たづねて來られたまでは決して再び行く氣はなかったのです。

『縁』の終りの方にも書かれてありますが、行く行かぬに就て先生のお宅で話のあったその晩の歸りにも、美知代さんは、「今が私の生きるか死ぬるかの境目だから、若し、一緒にやるやうなことがあったら、私は再び藝術の道には立てないのだから。」と、私の手を握つて泣かれたぐらゐです。そして二三日すると出て行かれたのです。私は、決して一緒になどなられないものと思つて居ました。然し美知代さんは非常に感情の強い方で、その周囲や、自分を能く批判しないで、感情にまかして事をされますから、どんなに堅い決心や覺悟をされましても、何事にか打つかると直ぐにその堅い決心も覺悟も破れて了ふのです。そんなわけで黙つて出られたものゝ、出た後まで決して先生や私に對してあの作品に現はれたやうな感情を持つて居られなかつたのは事實だらうと思つてゐます。

○記者。 田山さんは美知代さんに對して何う云ふ心持ちで居られるのです。

○仙子。 何とも思つては居られません。一體、あの事の根本は皆誤解から起つて居ることのやうに思はれます。永代さんや、美知代さんに、先生のお心が能く分つて居ないのです。先生のお心持ちが二人にしつくりと分りさへすれば、決してあゝ云ふ結果にはならなくても好かつたのだと思ひます。

○記者。 若し、美知代さんが再び田山先生へ歸つて來るやうなことがあったら、田山さんは之れからも世話をして上げられるでせうか。

○仙子。 それは、先生のお心持ちさへ分つたら、先生は何時だつて變らずに世話をし上げてられるでせう。それに先生は美知代さんと云ふ人の運命をあゝ風にしたのは、全く自分が『蒲團』を書いたからだ、その事を非常に心配して居られます。

○記者。 『蒲團』の爲めにあゝなつたと云ふ事實でもあるのですか。

○仙子。 いいえ、決してそんなことはありませんまいが、『蒲團』に書かれなくても恐らく美知代さんと云ふ人はあゝなる人でしたでせう。

○記者。 『蒲團』に書かれた當時のやうな心持ちが、美知代さんに對して今でも田山

さんにはあるのですか。

○仙子。 『蒲團』當時のことは知りませんから、何うですか。併し、さうは思へません、生成はどう云ふ心持ちがありましたも、決してその心持ち通りに動かされはしない。絶えず自分を批判したり責めたりして居られます。

○記者。 田山さんの美知代さんに對する態度は何うです。

○仙子。 師として誠に親切であり、行き届いた態度です。自分の方であゝするとか斯うするとか云ふ世話振りではありませんが、あゝ云ふ正直な方ですから、なさることは皆親切であります。

底本…「水野仙子全集」第五卷

初出…「文章世界」第十四卷第一号明治四十四年一月

テキスト入力…小林 徹

公開…令和五年十二月十四日

[リンク…水野仙子「作品年譜」](#)

[水野仙子ホームページ](#)